

スラヴ諸語における放牧地を意味する語の史的発達

Historical Development of the Words for Pasture in the Slavic Languages

佐藤 規祥

Sato Noriyoshi

Abstract

In this paper I attempt to account for primitive pasturage in the light of the reconstruction of the original meaning of the words for pasture in the Slavic languages. The lexicons, denoting pasture and/or meadow, which are mainly distributed around the Carpathian Mountains, could presumably have been inherited from the last stage in proto-Slavic, because of their morphologically novel features. Thus, it is conceived that these nouns would have been dispersed by the Slavic migration, apparently associated with transhumance pastoralism in the Balkans.

However, the other lexicons with archaic features which are attested frequently in several Slavic languages, are assumed to have been represented primarily without distinction between meadow and pasture. Most of the aforementioned nouns are derivatives from the proto-Slavic verb *pasti “to pasture”, which is cognate with the verb pasco “I pasture” in Latin. Moreover, the lexicon denoting “waterlogged deciduous forest”, as well as “grassland, pasture” has its precise counterpart in Latin. It suggests that the ancestors of Slavic peoples evidently would have pastured in the marshy woodlands.

キーワード: スラヴ諸語 祖語 等語線 放牧地 林内放牧

1. 序説

1000 年期前半にスラヴ諸族が分裂、拡散した後、定住した各地域において伝統的な形態の牧畜が継続されたのは間違いない。しかしながら、その祖先の源郷地として定められているウクライナの西北部を主とした地域から遠く離れ移住した、ロシア北方の森林地帯やアルプス東端、バルカン半島の西部、南部などのように、それまでとは生態環境の異なる土地で旧来の牧畜がそのままの姿で継承されたとは限らないはずである。実際、カルパチア山脈から南部のトランシルヴァニア山脈、さらにディナールアルプスなどではスラヴ諸族が定住するよりはるか以前、少なくとも青銅器時代には移牧が定着していたことが知られている(Harding 2000,138)。移牧は主として地中海周辺で広範に行われ、夏季に乾燥する平地から徐々に高地の山岳地に牧草を求め

て垂直移動する形態の放牧である。他方で、より内陸のアルプス北部やオーストリアのチロル地方における伝統的な移牧もまた、すでに新石器時代から定着していたことが知られている (Vorren 1993, 145, 155)。これと対照的にウクライナ南部の比較的温暖で乾燥したステップ地帯では山岳地帯がなく、歴史時代に至るまで新たな牧草地を求めて平地移動する遊牧が定着していた。

それにも関わらず、カルパチア山脈の北斜面に面し内陸の気候帯ではあるが植生環境の異なる原スラヴ人の源郷地において彼ら自身による移牧が行われていたかは疑わしい。また、中央ヨーロッパのドイツでは中世以後ですら伝統的な林内放牧が行われてきたことはよく知られている (ラートカウ 2013, 47, 67; ハーゼル 1996, 71-74)。ウクライナ北西部は西部の山岳地帯だけでなく、北部に広大な低湿地または全体的に森林地帯が優占しており、林内放牧が定着していたことは十分に考えられる。しかしながら、原スラヴ人が放牧を行っていた事実は疑いないにも関わらず、その形態については考古学的に裏付けとなる決定的な証拠が残りなくいたため、議論される機会が少ない。そこで、本論考においてはスラヴ諸語並びに関連する印欧諸語を対象とした史的比較言語学の方法論に基づき、とくに放牧地または牧草地を表す語の語源に焦点を当て、原スラヴ人の放牧の形態について考察したい。

2. 放牧地を表す語彙

スラヴ諸語においては一般に放牧地を表す複数の語彙表現が認められる。中でも広く標準語に浸透している語では、放牧という行為がそれを行う場所または目的地である放牧地と語彙表現でしばしば区別されない。すなわち、ある目的地に「放牧しに行く」ことは「放牧地に行く」ことと語彙的に区別なく表現される。以下の対応例 1 はスラヴ祖語の再建形 *pastva または *pastva に遡及する語であるのは間違いない (*印は慣用で理論的に想定された音声または形態であることを記す)。

1. Old Rus. паства 「放牧, 放牧地, 放牧する家畜(とくに羊)」, Rus. паства 「同」(CPHG 25, 261), Old Ukr., Ukr. паства 「放牧」, OCS. паства 「家畜の群れ」, SCr. pašva 「家畜の群れ」, Sloven. pašva 「痩せた牧草地」, Cz., Old Slovak., Slovak. pastva 「放牧, 牧草, 牧草地」(HSSJ 3, 483), Pol. pastwa 「放牧, 牧草」など。

しかしながら、祖語における語義を想定するのは単純ではなさそうである。だが、そもそも当初から語義に両義性が備わっていた可能性も排除できない。さらに南スラヴ諸語においては「家畜の群れ」を意味するように、明らかに二次的に発達した意味も観察される。

他方で、上記の例に見られる多義性が反映せず、とくに「放牧地」を意味する名詞の例 2 もまた存在する。明らかに前例の名詞から接尾辞 *-ina で拡張した語である。それでも実際の語の運用から類推した結果、二次的に前例 1 の名詞のように「放牧」の意味が発達したと思われる。このように実際の語の運用においては「放牧地」と「放牧」の両義性は避けがたいことが分かる。

2. Old Rus. па́ствина「放牧地, 放牧, 家畜の群れ」, Rus. па́стинá「牛」(СРНГ 25, 262), OCS. па́ствина「放牧地」, SCr. pastvina「家畜の群れ」, Sloven. pastvína「放牧地」, Cz., Slovak. pastvina「放牧地, 牧草地」など。

さらに、行為を行う場所を示す名詞を派生する生産的な接尾辞 *-sko, *-šče で拡張した新しい語 *pastvisko, *pastvišče が発達した。南スラヴ諸語には全く反映されないことから、祖語における比較的遅い時代に形成されたと考えられる。相対的に新しい名詞であることと接尾辞の示す意味機能の故に、二次的な語義の発達が進んでいない。その語彙対応は以下の通りである。

3. Old Rus. па́стище「放牧地」, Cz. pastviště, pastvisko「同」, Slovak. pastvisko「同」, Pol. pastwisko「放牧地, 放牧」など。

上記の対応例 2, 3 はいずれもスラヴ祖語の語幹 *pastv- からそれぞれ異なる接尾辞で二次的に発達した名詞であるが、その *pastva 自体は「放牧する, 草を食ませる」を意味する動詞語幹 *pas- に古来生産性が保持された接尾辞 *-tva が付加、形成された目的分詞 (supinum) に由来する名詞である。その祖語の再建形 *pasti, *pasq に由来する動詞の対応例は以下の通りである。

4. Old Rus. па́сти, пасоу「放牧する, (家畜に)草を食ませる」, Rus. па́сти, пасу́「同」, Ukr. па́сти, пасу́「同」, OCS. па́сти, пасж「同」, Bulg. па́са「同」, SCr. pǎsti, pásem「同」, Sloven. pásti, pásem「見守る, 番をする, 放牧する」, Cz. pásti, pasu「放牧する」, Slovak. pást', pasie「同」, Pol. paść, pasę「同」など。

スラヴ祖語において上の動詞の語幹からは、さらに他のいくつかの接尾辞を介して様々な名詞が派生した。まず、動詞で表される意味を名詞化する非常に生産的な接尾辞 *-ьba によって名詞 *pasьba「放牧」が形成された。スラヴ諸語における対応例は以下の通りである。

5. Old Slovak. pasba「放牧, 放牧地」(HSSJ 3, 479), Pol. paśba「放牧地」, Ukr. па́сьба「未耕作地」(Лысенко 1966, 40)など。

上記の古風な語形の名詞は、別のより新しい語基 *past- によって特徴付けられる名詞 (1, 2, 3 の例) が先行して浸透したために、限られた地域の方言にのみ使用されたようである (ЭССЯ 41, 216)。とくにウクライナ北西方言の一部から、ポーランド語、スロヴァキア語というカルパチア山脈周辺に分布する方言に限って現れる事実を考慮に入れると、かつてカルパチア山脈を拠点として移牧を行うスラヴ系の牧人集団の間で用いられた語彙表現であった可能性が強い。それ

にも関わらず、この名詞の語形は決して新しいとは言いきれない。それ故に、少なくともスラヴ人が拡散する直前までにカルパチア地方において原スラヴ人の一部の集団が移牧を開始していたことを示す根拠になりえる。そればかりでなく、その牧人集団の用いる方言が同じ言語を話す他のスラヴ人の方言と互いに干渉することがなかったことが推察される。この問題に関しては、かつてかなり詳細な実地調査を Клепикова が行い、牧畜関連の用語に焦点を当て、各地の方言の語形を整理した。しかし、カルパチア地方における原スラヴ人の言語的寄与は複雑で、その歴史的経緯の解明は相当難解である (Клепикова 1974)。

なお、南スラヴ・東スラヴ諸語においては同様に動詞語幹 *pas- を基盤に、行為を行う場所を示す接尾辞 *-išče で派生した名詞が広く現れる。これもまた祖語において「放牧地」を表す比較的古い語彙 *pasišče であると推定される。しかしながら、その分布域がそれぞれの言語の一部の方言に限られており、スラヴ祖語における方言形式の一つであったに違いない。

6. Rus., Ukr. пасище 「放牧地」(ЭССЯ 41, 163), Bulg. пасище 「放牧地」, SCr. пашиште 「同」(Daničić 1962, 282), Sloven. pasišče 「同」など。

上記の例 5, 6 に対し、前述の名詞 1 *pastva の語幹に基づき、その動詞の語幹 *pas- が異分析された結果、語幹 *past- から同じ接尾辞 *-ьба を持つ名詞 *pastьба が新たに発生した。この接尾辞は本来なら動詞の語幹につくものであるから、名詞の語幹から派生すること自体が改新された語形であることを表している。ただし、この名詞はスロヴァキア語と東スラヴ諸語に限って現れ、祖語の崩壊期に近い年代にとくに一部の方言のみで発生したと考えられる。その主な対応例は以下の通りである。

7. Old Slovak. pasba 「放牧」(<*pastba), Old Rus. пастьба 「放牧」, Rus. пастьба 「放牧地, 放牧期」など(СРНГ 25, 269; ЭССЯ 41, 211)。

さらに、上の名詞 7 から 3 の対応例に並行するように、接尾辞 *-isko, *-išče によって派生した名詞 *pastьb-isko, *pastьb-išče 「放牧地」が祖語において形成された。この名詞も同様にブルガリア語、マケドニア語と東スラヴ諸語を中心に現れることから、祖語の崩壊期に近い年代に一部の方言に限り拡散したと考えられる(ЭССЯ 41, 212)。

8. Old Rus. пастьбище 「放牧」 Rus. пастьбище 「森林か草原の柵で囲まれた放牧場」(СРНГ 25, 261), Ukr. пастьбище 「放牧地」, Bulg. пасбище 「放牧地」など。

他方で、西スラヴ諸語のうちスロヴァキア語とポーランド語方言、東スラヴ諸語のうちウクライナ語とベラルーシ語という比較的狭い地域にのみ分布する以下のような語形が観察される(ЭССЯ 41, 178; Karaš 1975, 94)。

9. Ukr. пасовисько, пасовище 「山岳地の放牧地」, Old Slovak. pasovisko 「放牧地」, Pol. pasowisko 「同」, Brus. пасовище 「同」など。

上記の例は名詞ではなく、動詞の語幹に基づき、全く新しい形態の接尾辞 *-ovisko, -ovišče を介して派生した語形 *pasovisko または *pasovišče から発達したものである。また、これも同様にあたかも祖語の一部の方言に限り発達した語形のように見える。さらに、その分布圏がカルパチア地方に集中していることから、より限定された地域に発生した語形が次第に拡散したようにも思われる。より厳密に判断するならば、上記で指摘した例 5 *pasba と同様に、専らカルパチア山脈を拠点として移牧を行う牧人集団の間で用いられた語彙表現であった可能性が高いといえる。その意味では、むしろ祖語が崩壊した後すぐウクライナ語のカルパチア地域のいずれかの方言から発し拡散した語であるかもしれない。とくにウクライナ語方言の語義では「山岳地帯の放牧地」を意味することからもその事実を裏付けることができる(Karaš 1975, 94)。他方で、この他の「放牧地」を意味する前掲の名詞はいずれもそのような限定的な意味を表すことはほとんどない。従って、祖語において古来用いられてきた語彙の表す「放牧地」は、とくに山岳地域における開けた放牧地を示していなかったに違いない。言い換えるならば、祖語の時代における原スラヴ人は、現代まで引き継がれてきたカルパチア地方に観察されるような季節的な移動を伴う放牧の形態を知らなかったか、もしくはあまり一般には浸透していなかった形態であったと言えそうである。

ところで、名詞化した語幹から派生せず、動詞語幹 *pas- から名詞化した古形を示す語がもう 2 例(10, 11)観察される。その一つは非常に古風な接尾辞 *-ja で女性名詞化した祖語の語形 *paša (<*pasja)である。この語はスラヴ諸語に広く観察され、語義は「放牧地」「放牧」「牧草」などに多義性が発達している事実を考慮に入れると、祖語の比較的古い年代に形成された名詞であるに違いない。その対応例を一部示すと、以下の通りである。

10. Rus. паша 「放牧地, 草地, 牧草, 乾し草」(СРПГ 25, 303), Ukr. паша 「牧草」, OCS. паша 「放牧地」, Bulg. паша 「放牧地, 牧草, 放牧」, SCr. pašа 「放牧地, 牧草, 放牧地」, Sloven. pašа 「放牧地, 牧草」, Cz. paš'a 「放牧地」(Lamprecht 1963, 95), Slovak. pašа 「放牧地, 放牧, 牧草」, Pol. pasza 「牧草, 牧草地, 放牧」など。

上記の名詞 10 に特徴的な点は、複数の言語で「牧草」または「牧草地」を意味するところである。ヨーロッパでは少なくとも歴史時代において休耕地を放牧地か牧草地のいずれかに利用する土地利用が定着した。牧草地または採草地は、青草のなくなる冬季期間に備え、夏季中に刈り集め乾燥させ飼料にするために牧草を生育させる土地である。ところが、牧草地が時期を変え放牧地に利用されることもありえた。それゆえに *paša という語に放牧地と牧草地の両義性が反映するのは不自然ではないといえる。それに対して、個々の地域方言に限ると専ら「牧草」を意味することから、それが原義を伝える用法であると推定される。すなわち、原義の刈り取り用

の「牧草」からその生育地の「牧草地」に、さらにそこから「放牧地」へと語義が拡張したと想定される。このように祖語で *paša が「牧草」を意味していたと想定すると、牧草を意味する語とは別に祖語において牧草地を意味する語が存在したかという問題が生じる。

もう一つの名詞 11 は動詞語幹 *pas- が名詞化した古形を保持した男性名詞 (スラヴ祖語 *pasъ) である。さらに、上掲の例に多く観察されたように動詞的な放牧行為を同時に表現することもない。従って、この語彙とは別に他の名詞によって放牧を示す語彙があったと想定されえる。その意味では、スラヴ祖語において原初的段階で用いられた放牧地を表すもとの名詞であったと推定される。以下の通り現代語に保持された対応例は極めて限られる(ЭССЯ 41, 213)。

11. SCr. pās 「放牧地, 冠水森林, 峡谷」, Rus. pác 「放牧地」など。

上記のセルビア・クロアチア語の語義に「冠水森林」を示す事実は示唆的である。古来、当該言語の領域における放牧の形態はカルパチア山脈一帯で定着しているのと同様に、ディナールアルプスを拠点とした移牧が行われてきたことで知られている(Клепикова 1974, 18)。それにも関わらず、このセルビア・クロアチア語の名詞が示す「放牧地」とは山岳地帯で開けた放牧地ではなく、むしろ低地または峡谷に見られる「冠水森林」を示している。この意味を併せ持つ背景は次の様に推論することができよう。すなわち、スラヴ諸族がバルカン半島に定住した当時、すでに当該領域における移牧による山岳放牧が広範に浸透し、その結果、放牧地が山岳地帯にあることを暗示するようになった。それに対して、スラヴ文化にとってより伝統的とはいえ、低地の森林地帯における放牧は歴史時代において次第に衰退する傾向にあった。このため、低地の森林地帯における放牧地は極めて古風な形態の語 pās によって区別、表現されたのであろう。

さらに、このセルビア・クロアチア語の語義に基づき原スラヴ人の行った放牧の形態もまた同様に想定されえる。すでに検討した放牧地を表す複数のスラヴ祖語の名詞 *pastъbišće, *pastvina, *pastvišće, *pasišće などには必ずしも特定の景観、地勢を表現しておらず、単に放牧するための土地一帯を示すに過ぎない。その事実が二次的に「放牧」の意味を表すに至ったと考えられる。これらと対比してより古風な語形 *pasъ は本来の放牧形態を示す冠水森林における放牧地を意味していたと想定される。従って、少なくともこの名詞に想定される語義に基づく限り、原スラヴ人の領域においては冠水森林を含む林内放牧のための土地で家畜の放牧を古来行っていたと推論される。もしそうだとすれば、林内放牧に代わる山岳放牧が果たして祖語の時代にどれほどまで浸透していたか、あるいはそもそも移牧自体が原スラヴ人の社会に知られていたかが論点になりえる。本論においてはそれを言語学的な証拠に基づき論証することが可能なのかさらに検討したい。

3. 牧草地

これまでに掲出した例からも明らかなように、スラヴ諸語において通常「放牧地」を指す語は「牧草地」も指し、語彙的に区別しないことが多い。一般論としては、大久保が記したようにか

つては休閑地に冬季中の乾し草を得るために野草を生育し、その刈り跡の草丈の低い草地は共同の放牧地に使われたという(大久保 2001, 3)。このように同一の地所が時期を変えて牧草地と放牧地という異なる役割に利用されたのであれば、言語表現の上で区別する必要はなかったかもしれない。これとは対照的に英語表現におけるように通常は採草地を指す meadow と放牧地を指す pasture とを明確に区別する言語もある。なお、草地学では meadow は採草野草地、pasture は牧草地 (または人口草地) と称せられるが、ここでは混乱を避けるためその術語は採用しない (大久保 2001, 18)。放牧地と採草地を語彙的に区別する必要性は、空間的に別々の個所に放牧地と採草地が共起する場合に発生しえる (大黒 2015, 44-48)。けれども、そのような条件が普遍的に原初的な放牧にあったと断定することはできない。このように牧草地と放牧地の利用法が原初的なスラヴ社会においてどのように行われていたか、考古学的にも言語学的にも証拠となる手掛かりに欠けよく分かっていない。そこで、次に歴史時代における文献記録に基づきそれらの語彙表現から確認できる事実を整理したい。

古チェコ語の 15 世紀の記録には pastva が「放牧地」または「放牧」を表す次の用例 12, 13 が見つかる。

12. bieše ta hora k paftwam výborná

「その山は草を食ませるのに申し分なかった」

13. dobytek v ty lúky na pastvu hnáti a pásti

「家畜をその草地に放牧しに追いやり、草を食ませる」

前記の二例に対して、次の pastvisko, pastviště の用例 14, 15 はとくに「牧草地」を指す (いずれも 15 世紀)。とくに 15 の用例では pastva 「放牧地」と pastviště 「牧草地」が併記されることから、そこに地所の用途の違いが意図的に表現されている点は注目すべきである。

14. seno z toho pastviska sklizené

「その牧草地から刈り集めた干し草」

15. [tvrz] s lukami, s pastvami, pastviščemi, s rybníky, rybníčiščemi

「草地、放牧地、牧草地、貯水池、養魚場を備えた[居城]」

上記の用例に観察されるように動詞的な放牧行為と関係付けられる「放牧地」は pastva の語形が用いられ、名詞の対象の牧草と関係付けられる「牧草地」は pastviště が用いられることが分かる。すでに論じたように、祖語の *pastvište は *pastva から派生したが、南スラヴ諸語には全く反映しないので、祖語の比較的遅い年代に一部地域の方言で発生した語であると推論した。この語用の事実だけにに基づき実際の生活実態を反映しているとは断言できないが、社会制度の

変化に応じた語彙表現が反映し始めた証拠になると思われる。

4. 「放牧する」を意味する語彙

ここまで考察してきた名詞はいずれもスラヴ祖語において例 4 の「放牧する」を意味する動詞 *pasti, *pasq から直接的または間接的に派生したものであり、それらの多くは「放牧地」または「放牧」を、一部は「牧草」を意味したと想定される語であった。そこで、次にスラヴ諸語以外の印欧諸語との比較により、対応する同源語の古さについて検討したい。

まず、上記のスラヴ祖語の動詞がとくにラテン語の動詞 pāscō, pāscere「放牧する」に音韻論的にも意味論的にも正確に対応することが知られている(Machek 1971, 436; ЭССЯ 41, 189; Králik 2015, 425)。この対応には問題がないが、音韻変化に補足的な説明が必要である。というのは、一方のラテン語の子音連続 -sc- には、本来の音連続が忠実に反映するにも関わらず、satəm 語群に属するスラヴ祖語における動詞語幹の子音 *s には、インド・ヨーロッパ祖語の *-s- か *-sĕ- の何れから発したのか弁別的に反映されないからである。そのため Machek が主張するように、スラヴ祖語の子音 *s はインド・ヨーロッパ祖語の *-sĕ- が規則的に変化した (*pāsĕ- > *pāss- > *pas-) のではなく、単音の *-s- であるという解釈 (*pās- > *pas-) も成立しえる (Machek 1971, 436)。つまり、これはラテン語における名詞 pāstus, -ūs「放牧, 牧草地」と pābulum (< *pā-d^hlom)「飼料, 牧草」の語幹がそれぞれ pās-, pā であることをその根拠としている。けれども、この難題を決定的に解決し得る証拠は得られない。それ故に、いくつかの状況証拠に基づき推論する以外に術はない。なお、ヒッタイト語には pahš-「大事にしまう, 守る」という語形が反映する一方で、トカラ語 B では pāsk-「見守る」という語形が反映する故に、いずれの語形もインド・ヨーロッパ祖語に存在したことは排除しがたい(ЭССЯ 41, 189)。いずれにせよスラヴ祖語において 2 つの語形 *pās-, *pāsĕ- に由来する動詞が併存したとすれば、規則的な音韻変化の結果、いずれも同一の語形 *pas- になる。そこで、スロヴェニア語における動詞 pásti, pásem の語義「見守る, 監視する」は、インド・ヨーロッパ祖語のより古い意味を保持する語形 *pasq < *pās- に由来するものであり、これと併存して、ラテン語と同じ改新形の *pāsĕ- とが規則的な音韻変化の結果で融合したという解釈も成立しえる。

ヒッタイト語とトカラ語 B において動詞の語義が未だ「放牧する」の意味に発達していないという事実は、スラヴ祖語がラテン語の父祖言語により近い関係にあることを裏付けている。これは両語派の間で共通の動詞拡張辞 *-sĕ- によって「放牧する」の語義を発達させたという解釈の方がいっそう説得力を持つ。新しい語形成と語義の発達の側面において、スラヴ諸語とラテン語の間にこのような等語線が現れるのは稀な現象ではない。そればかりか、スラヴ諸語に近縁のバルト諸語に対応する語が現れないこともまた、この動詞の語義の発達には放牧の形態に関する共通の環境下の地域文化的背景があったことを暗示しているようにも思われる。ただし、それを論証するには少なくとも、さらに両語派に共通の放牧に関する等語線が現れることが前提になる。

そこで、先に示した動詞 *pasti から派生した最古の語形の名詞 1, 11 の語源について検討し

たい。何故ならば、いずれのスラヴ祖語の再建形 *pastьva, *pasь も以下の通りラテン語に対応例が現れるからである。しかしながら、この重要な語彙対応が語源辞典ではこれまで記されてこなかった。

16. ラテン語 pāstus, -ūs 「放牧, 牧草地, 食料」 < *pāstu-s, スラヴ祖語 *pastьva < *pāstū-.
 17. ラテン語 pāscuum 「放牧地, 牧草地」 < *pāsku-om, スラヴ祖語 *pasь < *pāsku-.

上の 16 の語形は動詞の目的分詞 (supinum) pāstu- に由来する形態である。それがスラヴ祖語で二次的に -a 語幹の女性名詞に改変した (Meillet 1961, 305)。これには同じ ū- 語幹のラテン語 mortuus 「死んだ」 (< *mortū-) にチェコ語 mrtvý (< *mьrtьv- < *mьrtū-) 「死んだ」が対応する同様の稀な例が見られる (Meillet 1961, 306)。そればかりか、目的分詞の機能を反映した意味の点でもまた放牧と放牧地の区別を示さない *past(ь)va と pāstus に対し、放牧地だけを表す *pasь と pāscuum の語用上の対立においても共通の現象が反映する。ラテン語のそれぞれの用例を以下に示す。

18. Cum radiērunt ad stabula ē pāstū, (Varro 2, 2, 13)

「放牧から小屋に戻るとき、」

19. sacrārumque Melān pāscua laeta boum. (Ovidius, Fasti 4, 476)

「聖なる牛どもが喜ぶメラーズの牧場を」

以上のように、スラヴ祖語においては幾つもの異なる接尾辞で拡張した改新形が派生したとはいえ、それらの派生源の動詞と名詞はラテン語との間に形態と意味の共通する語彙の等語線が現れるという点はとりわけ注視すべきである。

5. 山岳放牧と林内放牧

上述の通り、スラヴ諸語において放牧地と関係付けられる数多くの語彙は、動詞 *pasti を基に派生した名詞であった。それらのうち主として南スラヴ諸語やウクライナ語、スロヴァキア語などにはカルパチア山脈やディナールアルプスまたはスロヴェニアの東部アルプスなどにおける山岳放牧に結び付けられる放牧地を表現する語彙があると論じた。他方で、ちょうどそれと重なり合う地域で全く異なる以下の語彙表現が観察される。

20. Old Rus. полонина 「谷間, 木のない平地, 不毛の畑」 (СРЯ 16, 242), Ukr. полонина 「山上の平地, 山頂の放牧地」, Bulg. планина 「山, 山脈」, SCr. planina 「山, 森に覆われた山」, Sloven. planina 「樹木のない山, 山岳の放牧地, 山地の草地」, Cz. planina 「樹木のない平地」, Slovak. planina 「樹木のない高原」.

上記の名詞はスラヴ祖語 *polnina から発したと推定される。この語の祖語における語義の発達とその解釈については繰り返し議論されてきた (Илич-Свитыч 1960, 223; Толстой 1997, 32; Куркина 2011, 207)。何故ならば、南スラヴ諸語における「山岳における樹木のない平地または放牧地」という語義がスラヴ諸族のバルカンへの拡散が始まる以前、祖語の段階で発達していたのは間違いなく、原スラヴ人による山岳地における放牧がカルパチア地方で定着していたことを裏付けるからである。さらに、その解釈に間違いなければ、原スラヴ人の源郷地の南限を定めるうえで重要な手掛かりになるからでもある。

一方で、カルパチア地方から遠く離れたロシア語においては「谷間」を表す。さらに、Толстойによれば祖語には *polnina だけでなく、*polнь, *polньja 等の語形も次の対応例に基づき再建されえる(Толстой 1969, 78)。

21. Ukr. полонь 「樹木のない牧草地または採草地」, SCr. plana 「森林中の狭い草地」, Sloven. plánja 「高山の草地, 牧草地」, Slovak., Cz. pláň 「高原」, Pol. płonia 「森林中の狭い草地」など。

上記の例においてもウクライナ語 полонь はカルパチア地方より北部に離れた低地のポーレンシエ方言の語彙である。これらも *polnina の場合と同様に「山岳の草地」を示す例と「森林の草地」を表す例に二分される。これは Толстой が Илич-Свитыч の説を受け主張したように「森林中の狭い草地」がより古い意味であり、山岳地における放牧の開始と同期に「山岳の草地」の意味を発達させたとして解釈するのが適切であろう。また、とくに名詞 *polнь の語頭に子音 p/b の交替が生じる次の名詞とも語源的に関係付けられると指摘した(Толстой 1969, 75-76)。

22. Rus. болонь 「草に覆われた川沿いの低地」, Ukr. болонь 「草地, 放牧地」.

これらの語形からスラヴ祖語 *bolнь が再建される。これらの語は専ら「低地の草地」を示していたことが分かる。ただし、祖語に再建される *polнь, *polnina と *bolнь との関係は不規則な子音対応の説明に直面し、むしろ排除される(ЭССЯ2, 178)。実際、このようなスラヴ諸語とバルト諸語における有声/無声の子音交替の現象が少なからず存在することは知られていたが、それに対する説得力ある解釈がほとんど行われて来なかった(Kiparsky 1968; Machek 1971, 11)。その現象を説明する最も有力な説については後で再び論じたい。

スラヴ祖語において「低地の草地」を意味したと想定される語 *poln-ina, *poln-ь はさらにロシア語 поле (<*polje) 「野原, 畑」, полый 「開けた, からの」の語基 *pol- と語源的に関係付けられる(Králík 2015, 443)。さらに他のインド・ヨーロッパ諸語においても同源語が現れることが知られている(Фасмер 1987, 3, 307-8, 320; Куркина 2011, 207)。とくにラテン語 plānus 「平らな」との関係は注意を惹く。そこで一旦、ラテン語の音韻変化を説明する必要がある。すなわち、対応するヒッタイト語 palḫi- 「広い」に laryngeal の *h 音が反映することから判断して、以下の音韻変化 23 に示されるようにラテン語の長母音を伴う -lā- がインド・ヨーロッパ語的ゼロ階梯

の長音の *ī (< *lh) から発したと想定される。

23. plānus < *plānos < *pīn-os < *pīhn-

この音韻変化は同じ条件下でラテン語 grānum (< *gīnom) がチェコ語 zrno (< *zīrno < *gīnom) に規則的に対応するという事実によって裏付けられる。ラテン語の形容詞 plānus は pal-am「明白に、公然と」の母音交替した語幹が古い接尾辞 -n で拡張したものである。これはちょうどスラヴ語派において *pol-「開けた」に同じ接尾辞 -n で拡張した語幹 *poln- を有する *polnina, *polнь と同様の語形成の発達である。同様の名詞、形容詞の形態論的発達は両語派以外には見られない。このような現象は二つの語派の関係が一時的にせよ近接していたことを暗示している。

ところで、Куркина は自著の中でスラヴ諸語に保持された焼畑農法に関する古い用語を語源学だけでなく、幅広い部門の資料を活用し考察している。その中で問題の *polnina という語もまたその用語の一つとして位置付けられている(Куркина 2011, 207)。すなわち、耕地を得るため森林を切り拓き、伐根し、焼き払われた結果得られた、平坦で見渡せる土地を元来は意味したと解される。同書における Куркина の議論の主題は焼畑農法を反映する用語に焦点を当てており、牧畜に関連する用語は検討の対象から除外している。しかしながら、実際には農耕と牧畜が密接に関連していることは言うまでもない。というのは、通常なら焼畑で利用された狭い農地は1~2年で放棄し、その後は休閑地として自然に再生し遷移した植生を利用するか、あるいは家畜用の牧草を刈り取るか、もしくは放牧させる土地として利用したからである。そのため、*polnina から発したスラヴ諸語における語の「森林中の狭い草地」や「樹木のない牧草地」という意味は、もとの森林の一部の地所を伐採し農地として利用した後に再生した草地を指したに違いない。このように焼畑農法は常に放牧とも深く結びつき、切り離すことは出来なかった。定期的に新しい耕地を開墾する焼畑農法によらず、一定の休耕期間を経たのち再び農地として利用する新しい農法が定着して初めて、放牧が休閑地に強く依存せずに放牧地を拡張する契機を得たと考えられる。今日知られるような森林を皆伐した放牧地として利用する開かれた草地は自然に発生したものではなく、農耕が拡散する新石器時代以前には存在しなかった。それは森林を伐採した農地を休閑地として利用する青銅器時代または初期鉄器時代までに発生したとされる(Behre 1988, 648, 666; Gregg 1988, 102)。従って、祖語の *polnina の語義に「山岳地における放牧地」の意味が二次的に発生したのは、その農法の変化を暗示しているかも知れない。しかしながら、これは焼畑農法の休閑地の利用とは無関係の自然環境を利用した放牧形態であるかもしれない。その背景には原スラヴ人による複雑な経緯をたどった焼畑農法の転換があったと推測される。

20世紀においてもスラヴ語圏のうちポーランドのカルパチア山脈、ブルガリア、ボスニアなどやとくにヨーロッパロシアの北方において伝統的な焼畑農法が継続されてきたという報告がある(Steensberg 1993, 125-131)。Steensberg の記述はヨーロッパ各地に残る焼畑農法に焦点が当てられるが、それが牧畜とどのように関連しているかにまで詳細に論じられていない。これに対

し、北方ロシアの焼畑農法が放牧とどう組み合わせられているか概略を伝える記述もある。それによると、放牧期の始めは家畜を草地で放牧するが、乾し草の刈り取り期が開始すると、休耕地に家畜を移動させる。このあと村落近くの空地に移し放牧地とする。最初の草地から乾し草を刈り取った後、そこから再び元の草地に移動させ、畑の穀類の収穫後はライ麦か春撒き穀類の刈り株の残る畑に移動させる(Власова 2004, 158)。これは低湿地を放牧地に利用した例ではないが、仮にこのように頻繁に村落近くの地所を移動しながら、次々と異なる休耕地を放牧に利用する体系が原初的な方法であったとすれば、放牧地と牧草地の語彙表現上の区別は確かに発達しなかったかもしれない。

ところで、耕地のために使用する犁の構造上の発達が達成されると、農地の表土だけでなく、深く堅い土壌の掘り起こしが可能になり、それまで利用できなかった土地の利用度を大きく変化させたはずである。その結果として、農耕地の拡大に伴う新たな休耕地や農耕放棄地を生み出し、同時に放牧地もまた増加したに違いない(Sherratt 1983, 100)。実際、Kaplan の研究に示されるように、ポーランドとその周辺地における森林地帯は主として農地の拡大によって前 1000 年間に顕著に縮小したとされる(Kaplan et al. 2009, 3023)。この調査方法の精度には問題点が未だ残されるとはいえ、原スラヴ人の源郷地に関わる地域において、時空的に森林地帯の縮小傾向が確認されたことは、土地利用法の本質的な変化があったことを暗示している。それは農法の変化だけでなく、放牧の規模や放牧地の確保の仕方にも変化が生じたことを示しているかもしれない。

6. 低湿地

ここまで提示したスラヴ諸語において放牧地を表す名詞の多くは、家畜を放牧するために利用される地所一般を指すための語彙であった。同時に、*polnina の一例を除き、それらの大部分は動詞 *pasti から派生した名詞でもあった。しかしながら、それらには具体的にどのような地勢の土地が利用されたか表わされていない。その原因は北方ロシアにおける焼畑と結びついた放牧の仕方に現れているように、休耕地や収穫後の刈り株の残る畑、草地などの地所の何れもが放牧地として活用されたことに関係しているかもしれない。

他方で、本来は草地を指すが放牧地をも意味する名詞がある。その対応例は以下の通りである。

24. Old Rus. луг 「低湿地の川岸や草地, 採草地, 放牧地, オーク樹林, 森に挟まれた若い木立」, Rus. луг 「雪融け時に冠水する牧草地, 低湿地, 草地, 放牧地」(СРПГ 17, 174), Old Ukr. лугъ 「川辺の低地, 草地(樹木が生えることもある)」, Ukr. луг 「放牧地や採草地に利用する草地, 低地の森林」, OCS. лѣгъ 「小さな林, 広葉樹林」, Bulg. лѣг 「草地, 低地, 広葉樹林, 湿地の小さな森, トウヒの森」, Old Sloven. log 「小さな森, 低林」(Megiser 1967), Sloven. lôg 「灌木, 低木」, SCr. lûg 「森, 茂み, 低地の低木, 広葉樹の小さな林」, Cz. luh 「樹木か灌木の生えた低湿地」, Slovak. luh 「湿地の高木林, 水際の森, 低湿地の広葉樹林」, Old Pol. łag 「冠水林, 水際か低地の放牧地」(Borecki 1976), Pol. łęg ~ łag, łęgu 「一時的に低木が茂る河谷の湿った草地」など。

この名詞は想定されるスラヴ祖語 *lǫǵь では「低湿地」を意味したはずであるが、「森林」や「放牧地」をなども指し、単に地勢、景観を指したとは考えられず、それが祖語期に何を意味したか想定するのが難しい。単に草地と関係づけられることがあるが、方言に現れる語義に古い意味を認め、沼沢地と関係づけられることもある(ЭССЯ 16, 140; Куркина 1969, 136)。

一般には、前掲の名詞 *lǫǵь は次のスラヴ諸語の名詞に基づき再建される祖語の同義語 *lǫka とも同源であると解釈される。

25. Old Rus. лукá 「川岸の曲がる所」, Rus. лукá 「蛇行する川に囲まれ冠水する草地, 川辺の放牧地, 森」(СРНГ 17, 187), Ukr. лукá 「冠水する草地, 川が急に曲がる個所, 草に覆われた平地」, OCS. лѣка 「湾」, Bulg. лѣка 「川が曲がる所の草地」, Sloven. lóka 「谷間の湿原」, SCr. lúka 「湾, 河岸の草地, 港」, Cz. louka 「草地」, Slovak. lúka 「草原」, Pol. łąka 「草地, 草原, 牧草地」.

この *lǫka に厳密に音韻対応するリトアニア語 lankà 「冠水する牧草地, 川沿いの沃野, 低湿地」との関係は疑いない(Fraenkel 1962, 1, 339)。他方で、スラヴ祖語の再建形 *lǫǵь もまたリトアニア語 léngè「谷間, 狭い牧草地」及び同義の lénkè と同源であることは疑いない(Fraenkel 1962, 1, 355-356)。さらに、この他にも鼻音が欠けた古代インド語 lokáh 「空地」、ラテン語 lūcus 「神聖な森林, 林」、古期高地ドイツ語 lōh 「森林の空地, 低木林」などが明らかに同源であるとされる(Walde & Hofmann 828; ЭССЯ 16, 140)。このように語形の対応に関しては大きな問題はないが、スラヴ祖語における語義の発達には説明が必要である。

次の古ロシア語の用例 21 からは併記された牧草地または採草地 (сѣножать) とは異なり、川辺の放牧地を表したことが推定される(СДЯ 4, 429)。

26. а дали есмо емоу за всеми лѣсы и з доубровами, и с полами и з сѣножатми и з доугами и зо всеми пожитки.

「我々は彼にあらゆる用材林、オーク樹林、畑、乾し草用採草地、川辺の放牧地全てを付け家財道具を与えた。」

また、次の古チェコ語の古い語句の用例 27 では、通念として luh 「草地」が森の伐採で生じることを動詞 porubati の語義「切り倒す, 伐採する」で示される(Novák 1934, 59)。

27. porubal luhy (ラテン語対訳 succidit lucos)

「森を切り倒し草地にする」

他方、次の古ポーランド語の用例 28 の łąka では草地が放牧地としても扱われたことを示す(Borecki 1976, 538)。

28. Páľą fię w łakách iáłowice tľufte ...

「肥えた雌の子牛らが放牧地で草を食んでいる。」

また、15 世紀の古チェコ語においては *lúka* が放牧地に利用する草地を表わす用例 29 が観察される。

29. že mu jest někdy na lúce pásl

「かつては草地で放牧したことがあったと」

このように古い用例から草地が放牧地として利用された事実があることは確認できる。しかしながら、その原初的な語義の想定とその意味変化を理解するには、以下の様に植物生態学の視座に立つ植生遷移 (succession) についての説明がより参考になるとと思われる。

河川沿いの低湿地では一定期間冠水する森林地帯の一部が伐採された後、自然の植生が再生し低湿地の草地が出現する。この土地を一時的に家畜の牧草地または放牧地として利用する。その後は放棄することで遷移が進行し落葉樹林が発達する。落葉樹林は生活に必要な食材、材木、薪など多様な資源を獲得する源泉となるが、これも長期の年数の経過により遷移がさらに進行し最終的には、これ以上遷移が進まない安定した極相の高木の針葉樹林に置き換わる(大黒他 2015, 45; 大久保 2001, 12-14; Folch 2017, 64-65, 113-114)。

こういった河川沿いの低湿地を管理、保護下に置き、その植生の遷移の各段階で生活に利用していたと考えられる。そこで、前掲のスラヴ諸語に見られる名詞の個々の語義を見ると、人間の介入によって二次的に発生した低湿地の草地から落葉樹林すなわち、広葉樹林を経て、トウヒに代表される高木の針葉樹林に至るまでのあらゆる遷移の段階を指している。従って、どの遷移の段階においても同一の管理された低湿地の地所が、ただ一つのスラヴ祖語の名詞 *lǫgь で表現されたと推定される。さらに、その低湿地の草地における放牧とは、一方で一時的な採草地として果たす役割もあるが、他方で家畜の飼料となる豊富な枝葉を供給する落葉樹林の草地で行われる林内放牧を示すことが分かる。このように植生の遷移に任せた循環的な土地の利用法には、森林を保護、管理する原初的な焼畑農法の一環が反映していると考えられる。ただし、この場合は低湿地を耕作地として機能させず、牧草地または放牧地として役立つ局面が現れている。それは草地が森林の土壌よりも耕作が困難であったため、放牧地または牧草地としての価値を優先させたという説明が成り立ちえる(Barker 1985, 105)。

ところで、スラヴ祖語 *lǫgь が人間の介入で二次的に発生した低湿地の草地であるのとは対照的に、先に示したラテン語 *lūcus*「神聖な森」は用例 30 の Plinius の著書『博物誌 (Natural history 17, 267)』や 31 の Ovidius の作品『変身物語 (Metamorphoses 8, 742)』に記されたように、人間の介入を禁制して維持された極相の樹林を指していると考えられる。

30. Idem arborēs religiōsās lūcōsque succīdī permīsit sacrificiō prius factō, ... trādidit.

「神聖な木々や森の伐採は、予め生贄が捧げられたら許されたと筆者(カトー)は伝える。」

31. Ille etiam Cereāle nemus violasse securī dīcītur et lūcōs ferrō temerasse vetustōs.

「ケレスの森を斧で冒瀆し、太古の聖林を鉄器で汚したとさえ言われる。」

他方、Ovidius の『祭歴 (Fasti 6, 411)』には明らかに湿地を指す用例 32 も確認される。

32. Hīc quoque lūcus erat iuncis et harūndine dēnsus et pedē vēlātō nōn adeunda palūs.

「ここにはトウシンソウと葦が密生する聖域で、靴を履いては近寄れない湿地もあった。」

従って、ラテン語 *lūcus* もまた葦が繁茂する低湿地を指すことが排除されるとは限らない。もう一つの問題点が子音の不規則な対応 k/g である。それはラテン語 *plānus*「平らな」と 21. **polnъ*, 22. **bolnъ* の間に見られる子音交替 p/b と同じ現象である。この問題の解決に向け G. Holzer が提示した説によると、書記記録を残さず消滅したトラキア系と推定される言語では特異な子音推移を発達させたため、その変化を反映する基層言語の借用語として説明されるとする。すなわち、その未知の言語においては規則的にインド・ヨーロッパ祖語の無声閉鎖音 (*p, *t, *k, *k̥) がそれぞれスラヴ諸語の有声音 (b, d, g, z) で反映し、同じくその有声帯気閉鎖音 (bʰ, dʰ, gʰ, ɡʰ) がスラヴ諸語の無声音 (p, t, k, s) で反映するというものである (Holzer 1989; Kortlandt 2020)。さらに、この音変化の特徴を示す基層の言語名を *temematic* 語と称した。

従って、ラテン語 *plānus* (< **p̄l̄n-os* < **plhn-*) にはチェコ語 *plán* (< **polnъ* < **polhn-*) が対応する一方で、ウクライナ語 *болонь* (< **bolnъ*) が *temematic* 由来の語であると説明される。同様に、ラテン語 *lūcus* (< **loukos*) は二次的に発生した鼻音を伴うポーランド語の女性名詞 *ląka* (< **lqk-a* < **lonk-*) の語幹に対応する一方で、その *lęg* (< **lqgъ* < **long-*) が *temematic* 由来の語であると説明される。ただし、前者 17,18 の対応例についてかつて指摘されたことはなく、後者 24 の対応例について Holzer 自身は控えめな立場をとった (Holzer 1989, 225)。

7. 結論

上述のような基層言語との接触が生じた年代は遅くとも前 1000 年期までに位置付けるのが妥当であると思われる。以上の通り、スラヴ諸語とラテン語の間の語彙対応とそれらの語義を考慮に入れると、いずれの言語集団の源郷地においても、河川沿いで定期的に冠水する低湿地における林内放牧が定着していたと推論することができる。他方で、証拠に乏しいカルパチア山脈を拠点とした山岳地における移牧が開始したのは、相対的に遅い年代であった可能性が高い。スラヴ諸語における放牧地または牧草地に関連する語彙のいくつかは、とりわけラテン語との間で顕著な等語線が現れる。このような現象は単なる偶然とは考え難く、放牧に関わる集団間の地域社会的、文化的な接触が背景にあったことが推測される。何故ならば、共同の放牧地の維持管理には常に関係する集団間における社会制度としての合意が不可欠なはずである。つまり、異なる言

語集団の間で放牧または放牧地を指す語彙が一致するという背景には、このように直接的に放牧地を共有するような状況が想定されえるからである。

本論考においては主として言語学的視点から専らスラヴ諸族の源郷地における原初的な放牧の形態あるいは放牧地に焦点を絞って考察したが、家畜の種別によって放牧がどう関わるかについて一切論じなかった。先史時代における牧畜文化については未解明の課題がまだ数多く残されている。言うまでもなく、言語学的な資料に基づく議論だけでは解明できる事実は極めて限られている。それ故に、今後さらに関連分野の成果の進展にも着目することで貢献したい。

言語名の略号は以下の通り。各言語の例は本文中でとくに記さない限り、それぞれ括弧内に記された各種辞書から引用した:

Brus. ベラルーシ語, Bulg. ブルガリア語 (Гергов 1975-78), Old Cz. 古チェコ語 (Gebauer 1970-), Cz. チェコ語 (SSJČ), Lat. ラテン語 (Thesaurus linguae latinae), Lith. リトアニア語 (Niedermann et al. 1932-68), OCS. 古教会スラヴ語 (Kurz 1966), Pol. ポーランド語 (PAN), Old Rus. 古ロシア語 (СДЯ; СРЯ; Срезневский 1955), Rus. ロシア語 (СРНГ), Old Slovak. 古スロヴァキア語 (HSSJ), Slovak. スロヴァキア語 (Kačala & Pisárčiková 2003), Sloven. スロヴェニア語 (Pleteršnik 1974), SCr. セルビア・クロアチア語 (Daničić 1880-1976; 1962), Old Ukr. 古ウクライナ語 (Гринчишин и др. 1977-1978), Ukr. ウクライナ語 (Гринченко 1958-1959; Білодід 1970-1980).

参考文献

- Barker, Graeme. 1985: *Prehistoric farming in Europe*. Cambridge University Press. Cambridge.
- Behre, Karl-Ernst. 1988: The rôle of man in European vegetation history. In: B. Huntley and T. Webb (eds.) *Vegetation history*. Kluwer Academic Publishers. 633-672.
- Borecki, Marian (red.). 1976: *Słownik języka polszczyzny 16 wieku*. Zakład Narodowy im. Ossolińskich. Wrocław.
- Daničić, Đura. 1962 (Originally published in 1863-1864): *Rječnik iz književnih starina srpskih*. 1-3. (reprint). Akademische Druck- u. Verlagsanstalt. Graz.
- Daničić, Đura. (eds.) 1880-1976: *Rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*. Knj.1-23. Jugoslavenska Akademija Znanosti i Umjetnosti. Zagreb.
- Fraenkel, Ernst. 1962-65: *Litauisches etymologisches Wörterbuch*. C. Winter. Heidelberg.
- Gebauer, Jan. 1970-: *Slovník staročeský*, 1-2 (reprint). Academia. Praha.
- Gregg, Susan. A. 1988: *Foragers and farmers: population interaction and agricultural expansions in prehistoric Europe*. University of Chicago. Chicago.
- Harding, A. F. 2000: *European society in the Bronze age*. Cambridge University Press. Cambridge.
- Holzer, Georg. 1989: *Entlehnungen aus einer bische unbekanten indogermanischen Sprache im Urslavischen und Urbaltischen*. Verlag der österreichischen Akademie der wissenschaften. Wien.
- Hruška, Jan František. 1907: *Dialektický slovník chodský*. Praha.
- HSSJ: Majtán, Milan. (red.) 1991-2008: *Historický slovník slovenského jazyka*. 1-7. Veda. Vydavateľstvo SAV.

- Bratislava.
- Kačala, Ján & Mária Pisárčiková (hl. red.) 2003: *Krátky slovník slovenského jazyka*. Veda. Vydavateľstvo SAV. Bratislava.
- Kaplan, J.D., K. Krumhardt, & N. Zimmermann. 2009: The prehistoric and preindustrial deforestation of Europe. *Quaternary Science Reviews*. 28. 3016-34.
- Karaś, Mieczysław. 1975 : *Studia nad dialektologią ukraińską i polską*. Nakład Uniwersytetu Jagielloń skiego.
- Kiparsky, Valentin. 1968: Slavische und baltische b/p-Fälle. *Scando-Slavica*. 14. 73-97.
- Kortlandt, Frederik. 2020: An Indo-European substratum in Slavic? In: F. Kortlandt. *Studies in Germanic, Indo-European and Indo-Uralic*. Rodopi. Amsterdam. New York. 73-80.
- Králik, Ľubor. 2015: *Stručný etymologický slovník slovenčiny*. Veda. Vydavateľstvo SAV. Bratislava.
- Kurz, Jozef. (hl. red.) 1966: *Slovník jazyka staroslovenského*. Academia. Praha.
- Lamprecht, Arnošt 1963: *Slovník středopavského nářečí*. Krajské nakladatelství. Ostrava.
- Megiser Hieronim. 1592: *Slovenisch-Deutsch-Lateinisches Wörterbuch*. (Annelies Läg Reid 1967: Otto Harrassowitz. Wiesbaden)
- Meillet, Antoine. 1961: *Études sur l'étymologie et le vocabulaire du vieux slave*. Seconde partie. 2e édition. Librairie Champion. Paris.
- Niedermann, Mar, Alfred Senn, Franz Brender. 1932-1968: *Wörterbuch der litauischen Schriftsprache*. Bd.1-5. C.Winter. Heidelberg.
- Novák, Karel. 1934: *Slovník k českým spisům husovým*. Česká akademie věd a umění. Praha.
- Ovidius. 1976 *Fasti: Ovid in six volumes V Fasti*. With an english translation by Sir James George Frazer. Harvard university press. Cambridge.
- Ovidius. 1977 *Metamorphoses: Ovid in six volumes III Metamorphoses*. With an english translation by Frank Justus Miller. Harvard university press. Cambridge.
- PAN: Polska akademia Nauk 1963: *Slovník jazyka polskiego*. Państwowe wydawnictwo naukowe. Warszawa.
- Pleteršnik, Maks. 1974: *Slovensko-nemški slovar*. 1-2. (Reprint, originally published in 1894-95) Cankarjeva založba. Ljubljana.
- Plinius secundus, G. 1960-1968: *Natural history*. Harvard University press. Cambridge.
- Sherrat, Andrew. 1983: The secondary exploitation of animals in the Old World. *World archaeology*. 15 (1). 90-104.
- SSJČ: Havránek, B. 1971: *Slovník spisovného jazyka českého*. 1-4. Academia. Praha.
- Stensberg, Axel 1993: *Fire-clearance husbandry: Traditional techniques throughout the world*. Poul Kristensen. Herning.
- Thesaurus linguae latinae*. 1-10. 1900-1995. Teubner. Stuttgart und Leipzig.
- Varro 1967: Marcus Terentius Cato. *On agriculture (Rerum rusticarum)*. With an english translation by William Davis Hooper, revised by Harrison Boyd Ash. Harvard University Press. Cambridge.
- Vorren, Karl-Dag, Brynhild Morkved & Sigmar Bortenschlager. 1993: Human impact on the Holocene forest line in the Central Alps. *Vegetation history and archaeobotany*. 2. 145-156.

- Walde, Alois & J. B. Hofmann. 1982: *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*. 1-2. Carl Winter. Heidelberg.
- Білодід, І. К. (ред.) 1970-1980: *Словник української мови*. Т.1-11. Наукова думка. Київ.
- Власова, И. В. (ред.) 2004: *Русский Север. Этническая история и народная культура XII-XX века*. Наука. Москва
- Геров, Найден. 1975-1978 (originally published in 1895-1908): *Речник на българския език*. Т.1-5, допълнение. (reprint). Български писател. София.
- Гринченко, Борис Д. 1958-1959 (originally published in 1907-1909): *Словарь української мови* (Reprint) Т.1-4. Вид-ство Академії наук української РСР. Київ.
- Гринчишин, Д. Г., Л. Л. Гумецька, І. М. Керницький (ред.). 1977-1978: *Словник староукраїнської мови 14-15ст.* Т.1-2. Наукова думка. Київ.
- Иллич-Свитыч, В. М. 1960: Лексический комментарий к карпатской миграции славян (Географический ландшафт). *Известия Академии Наук СССР. Отделение литературы и языка*. 21 (3). 222-232. .
- Клепикова, Г. П. 1974: *Славянская пастушеская терминология. Её генезис и распространение в языках карпатского ареала*. Москва.
- Куркина, Любовь Викторовна. 1969: Названия болот в славянских языках. *Этимология* 1967. 129-143.
- Куркина, Любовь Викторовна. 1981: Праславянские лексические диалектизмы южнославянских языков. *Этимология* 1979. 15-28.
- Куркина, Любовь Викторовна. 2012: *Культура подсечно-огневого земледелия в зеркале языка*. Азбуковник. Москва.
- Лысенко, А.С. 1966: Словарь диалектной лексики северной Житомирщины. В кн.: *Славянская лексикография и лексикология*. Наука. Москва.
- СДЯ: Аванесов, Р. И. (ред) 1988-1997 : *Словарь древнерусского языка (XI-XIV вв.)*, т.1-22. Русский язык. Москва.
- Срезневский, И. И. 1955: *Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам*. Akademische Druck- U. Verlagsanstalt.
- СРНГ: Филин, Ф. П. (ред.) 1965-1990 : *Словарь русских народных говоров*. Т.1-25. Наука. Москва.
- СРЯ: Аванесов, Р. И. 1977-1997: *Словарь русского языка XI-XVII вв.* Т.4-22. Наука. Москва.
- Толстой, Никита Ильич. 1969: *Славянская географическая терминология. Семасиологические этюды*. Наука. Москва.
- Толстой, Никита Ильич. 1997: Некоторые проблемы сравнительной славянской семасиологии. *Избранные труды. Том.1: Славянская лексикология и семасиология*. Языки русской культуры. Москва. 12-43.
- Фасмер, Макс 1986: *Этимологический словарь русского языка*. Москва.
- ЭССЯ: Трубачев, Олег Николаевич (ред.) 1974-2018: *Этимологический словарь славянских языков*. Т.1-41. Наука. Москва.
- 大久保忠且 2001: 『草地理』 文永堂出版.
- 大黒俊成・吉原佑・佐々木雄大 2015: 『草原生態学 生物多様性と生態系機能』 東京大学出版会.
- ハーゼル, カール. 1996: 『森が語るドイツの歴史』 築地書館.
- Folch, Ramon (編) 2017: 『世界自然環境大百科 7巻 温帯落葉樹林』 奥富清監訳 朝倉書店.

ラートカウ, ヨアヒム. 2013: 『木材と文明』 築地書館.